Part Ⅱ

世界の子どもたち

本シリーズは、フォトグラファー中西あゆみさんが
「世界の子どもの生活とあそびの今」をタイムリーにレポートします。

写真・文　中西あゆみ

ジャカルタに生きる＝
ジャボデタベックでの暮らし【2】

インドネシア

（ジャボデタベック＝ジャカルタとその周辺4都市ボゴー・デポック・タンガラン・ブカシ市の各頭文字から成る）

ジャカルタの隣町にあるデポック・バスターミナル。地元と長距離バスの発着駅として24時間利用客で賑わいます。ここは、ストリートキッズたちの住処でもあります。貧困から、親に気を遣って家を出る子もいれば、捨てられる子もいて事情はさまざまですが、遠く離れた故郷から物乞いをしながらバスを乗り継ぎ、各都市のターミナルに辿り着くケースが多いと言われています。デポック駅も例外ではありません。幼い子どもたちが、ターミナルで働く大人たちに見守られ、利用されながら生きています。

「ターミナルで暮らしたいか!?」親が子を叱るときに用いられる比喩に使われるほど危険なイメージのある場所。実際、窃盗などの犯罪も多く、子どもが暮らすには安全とは言えません。しかし、これだけストリートチルドレンが多いこの国でも、子どもがストリートで暮らす行為は違法とされています。少年刑務所、または大人に混じり一般刑務所に送られることもあり、残酷な扱いを受けることになります。彼らにとっては、これ以上バスで旅を続けるより、

デポック・バスターミナルをアジトにするストリートキッズたち。

幼い子どもは大きい子が面倒をみている。
笑顔を見せる幼児の歯は真っ黒だった。

子どもたちはターミナル内の一角にある
ゲームセンターの店先で寝泊まりしている。

ティッシュ販売のため、各自バスに向かうストリートキッズたち。
靴は履いていない。

ターミナルに住み着いた方がむしろ安全なのです。

その一角にあるゲームセンターの軒先で寝泊まりする子どもたち。ターミナル内の店で購入したティッシュを自ら売り歩くことで生計を立てています。収入は、菓子パンやジュースなど栄養バランスがとれていない食事、タバコやゲーム代にすべて消えてしまいます。お金の使い方を理解できる年令ではありません。彼らの存在で店側にも利益があることから、追い出したりはしません。大人たちと子どもたちの歪んだ相互関係が成り立っています。

喫煙の年令規制がないインドネシアでは、大人の真似をして幼いうちからタバコを吸い出してしまうストリートキッズが少なくありません。法律上、児童虐待にはあたらないため、とがめる大人はいません。自分が販売するティッシュ20個が入った大きな袋を抱え、くわえタバコをする子どもの表情は無邪気であり、大人びてもいます。ティッシュ20個は32000ルピア（約320円）で購入し、ひとつあたり2000〜3000ルピア（約20円〜30円）で、バスの乗客らに販売します。子どもの売り子に対してはお客も同情心に駆られます。3000ルピアで売れたらラッキー。多い日には50000ルピア（約500円）を稼ぎ出します。

中央ジャカルタのクンニガン地区にある高層住宅群。最近増加しているといわれる中流クラスのインドネシア人や、近隣で働くインド人、アラブ系の赴任外国人が多く暮らしています。共用敷地内では、親やメイドが子どもを遊ばせています。真新しい自転車に乗る子どもたちは皆靴を履いています。

午後11時半。南部ラグナン地区の交差点で、ウクレレを抱えて立っている少年がいます。信号待ちをする車に駆け寄り、一曲演奏して小銭を稼ぐためです。窓を開ける車はありませんが、誰かがお金を恵んでくれるまで、真夜中も立ち続けます。自分の身は自分で守るしかありません。幼い子どもたちにも特別扱いはないのです。富のあるものが力をもち、ないものはそこにすがるという構図が当たり前のように成り立っています。

©Sameer Al-Abdullah

中西あゆみ
フォトグラファー
東京出身。米国でフォトジャーナリズムを学ぶ。2010年よりインドネシアのジャカルタを拠点に活動。長編ドキュメンタリー映画を制作中。

ジャカルタ中心部クンニガン地区にある高層住宅。大雨が降る直前に家路を急ぐ。

食堂を営む母親の手伝いをして食器を洗う少女。
ジャカルタ南部ジャガカルサ地区

夜遅く、交差点でウクレレを抱えて物乞いをする少年。
ジャカルタ南部ラグナン地区

共用敷地内では安全な環境で子どもを遊ばせることができる。